

みられた。遊出細胞のアルカリフォスファターゼ検出結果は線維芽細胞は陽性、上皮細胞は陰性で、材料採取時の *in vivo* における歯端部歯胚組織のそれぞれの性状と同様であった。

演題7 多形腺腫にみられたリポ色素について

○佐 島 三重子, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

リポ色素にはリポフスチンとセロイド色素が含まれるがこれらは臓器組織の萎縮、壊死および加齢現象などに関連して出現する。現在のところこれらの色素と唾液腺腫瘍との関係についての報告はほとんどみられない。今回私共はヒトの良性唾液腺腫瘍である多形性腺腫にみられたリポ色素について、その性状および出現状態などを光顕的ならびに電顕的に検索した。

検索材料は歯学部口腔病理および医学部臨床病理で扱った多形性腺腫39例である。リポ色素はマッソン・フォンタナ染色で黒染しベルリン青で青染しないものを判定の基準とし、その他の染色法および自家螢

光所見も加えて確認した。

光顕的な組織化学の検索結果、リポ色素のほとんどをリポフスチンが占め一部にセロイド色素が認められた。またリポ色素は上皮構造をもつ腫瘍細胞および結合組織内の遊離細胞の両者に認められたが、その出現状態は胞体内に散在性にみられる場合とリポ色素顆粒が充満している場合があった。電顕的には腫瘍細胞の胞体内に電子度の高い小顆粒と滴状の脂肪滴が核周囲に集簇してみられ、これらは形態的にリポフスチンと思われた。

腫瘍組織の検索にあたっては光顕的に腫瘍細胞か結合組織内の細胞いずれかにリポ色素を認めた場合を陽性とし、これらと腫瘍の発生部位、患者の年齢、病愆期間との関連について検討した。全体的には39例のうちリポ色素陽性例は17例(43.6%)で、発生部位別にみると耳下腺では72.7%、顎下腺では50.0%、小唾液腺では27.3%となり大唾液腺原発の腫瘍に多く出現する傾向がみられた。年齢別にみると40才以上の場合にリポ色素の出現率は50%以上と40才未満よりやや高く、病愆期間別では5年以上の場合に60%以上と5年未満より高い傾向を示した。